英語の時の体系

山 下 美津子

English Temporal Systems

Mitsuko (NIEDA) YAMASHITA

Received April 30, 1994

抄録： 話されていることについての時の情報は，時の体系によって与えられる。この体系はおもに，時の位置づけの体系とアスペクトの体系からなる。時の位置づけの体系は，状況を時の流れの中に位置づけ，時制によって文法化される。時制は発話時，状況時，指示時の３種類の時点のうち，指示時点を示す。状況が起こった，または起こる時点である状況時点は，発話時点と指示時点との関係によって表される。一方，アスペクト体系は状況の内部構造に対する話者の視点を伝える。完結相か非完結相は状況が始点と終了点によって閉ざされているかいないかで決定され，その対立を直接表す文法形式は存在しない。進行形が唯一アスペクトを表し得るが，それは非完結相の内の進行相のみを文法化するものである。完了形は一義的には，状況時点は指示時点によりも前にあることを示すものであり，二義的にアスペクトに関する面を持つ。時の副詞類は，時との係わりによって３つに分類されるが，時の位置づけとアスペクトの体系を補い，時の情報を与えるのに大いに関与する。

Abstract: Temporal information of what is being talked about is given through Temporal systems. Their important constituents are Temporal location and Aspect systems. The Temporal location system locates the Situation in time and is grammaticized by Tense, which indicates Reference Time. Situation Time is realized in relation to Reference Time and Speech Time. The Aspect system refers to the inner structure of the Situation. Whether the Situation is closed by initial and final points or not determines the aspect of the Situation. There are no crucial forms in English which can grammaticize Perfective or Imperfective, while Progressive (aspect) is realized by the Progressive form. The Perfect primarily indicates that Situation Time precedes Reference Time, and secondarily, has an aspectual value. The Temporal Adverbials, which can be divided into three classes, participate in giving temporal information by helping these systems function properly.

Key words: Temporal systems, Tense, Aspect, Temporal Adverbials

英語の時の体系

Ⅰ．時に関する情報

一つの英語の文から，時に関して多くの情報が得られる。例えば，次の例文から我々は話されていることについて，さまざまの時に関する情報を知ることができる。それらは大きく2種類に分けられる。

(1) a. John wrote a letter.
b. John is writing a letter.
c. John will write a letter.

まず，話されていることが，（1．a）では過去の出来事であり，（1．b）では現在，（1．c）では未来のことであることがわかる。この際，基準となるのは，話している時であり，この基準を基にして，出来事が時の流れのどこであるかを示すことは，時に関する情報の一つの重要な面である。この情報は，動詞の時制，助動詞プラス動詞の形によって表されている。ここでは，話題となっている出来事の起こる時の位置付けが，時制によって文法化され，時制を示す形態素，およびその集合で示されている。しかし，時制と表されている時とは簡単には一対一の対応をなしておらず，同じ現在形で表されていても（1．b）では話している今現在のことを伝えているが，(2)では現在の習慣を，（3．a）（3．b）では未来のことを述べている。

(2) John swims in a pool everyday.
(3) a. John rehearses tomorrow.
b. John is rehearsing tomorrow.

ここで，文法化された時制は，出来事が起こった，または起こる時を直接示すのではないことが認められる。そこで，時制とはどのような時を表したものであるのかという問題，さらに，出来事が起こった，または起こる時はどのように知らされるのかという問題が起こってくる。さらに，時を表す副詞も重要な役割を果たしていることも明らかであり，それらの副詞が時制とどのような関係にあるかという点も重要となる。

時に関する情報としては，この出来事の時の流れの中での位置を伝えるだけでなく，もう一つ大切な情報がある。同じ現在時制で表されているが，（1．b）では話されている状況は発話時に起こっている最中であるが，(2)では現在起こっているのことではなく，現在の習慣を伝えているといった異なった情報も伝わってくる。これは，出来事の内部の構造についての情報である。また，

(4) John swam in a pool for an hour.

（1．a）も(4)も同じ過去時制で表されており，発話時より過去の出来事を伝えているが，（1．a）の文からは，手紙を書く行為は目的に達し既に完結していること，(4)からは，泳ぐ行為を一時間続けた事実のみが伝わり，行為が完了しているか否かは伝えられない。ここでも，出来事の内部の構造についての情報，つまり，話されていることのアスペクト面に関する情報が伝えられる。アスペクトは，先の時の位置を設定するのと並んで，時に関する重要な面である[1)]。さらに，（1．b）も（3．b）も時制は現在で，進行形が用いられているが，前者は，行為が現

在行われていることを伝えているが，後者は未来の予定を伝えており，現在の行為の進行を表してはいない。この違いには，副詞が重要な役割を果たしていることは明白である。また，(2)と（3．a）も副詞を入れ替えると，(2)の現在の習慣の意味はなくなり，逆に（3．a）が現在の習慣を表す。

(2)' John swims in a pool tomorrow.

(3)' a. John rehearses everyday.

(4)においては，この副詞 for an hour の果たす役割は，伝えようとする出来事の内部にかかわるものであり，tomorrow，yesterday の役割とは異なる。このように，時の体系を考察するうえで，時に関する副詞の役割は無視することはできない。

この論文では，英語の時に関する2つの体系，つまり時の位置づけに関する体系と，アスペクトを伝える体系を考察して行く。どの文法範疇がどのように関与し，いかなる機能をもつ形が，どのようにかかわりあってこれら二つの体系を構成しているかを明らかにする。つまり，英語の時に関する構造がどのように構成されているかを明らかにしたい。Ⅱ章では時の位置づけに関する体系，Ⅲ章ではアスペクトに関する体系，Ⅳ章では両体系のかかわりあい，Ⅴ章では時の副詞とこれらの体系との関係について調べていく。

Ⅱ．時の位置づけの体系

Ⅱ．1．Reichenbach の理論と時の種類

先にみたように，時に関する情報のうち，話されていることの時の流れでの位置を聞き手に知らせることが重要な，一つの面である。つまり，伝えようとする出来事，状態が過去，現在，未来のいずれかのものであることを知らせる働きである。その際，話されている時 Speech Time（略して以後，ST と記述する）が基準であり，今話題にしていることが，同じ時の流れの中で，ST より前であれば過去のこと，同時であれば現在，その後であれば未来のこととなる。

ここで述べる ST は，Reichenbach の理論の S を参考にしている[2)]。Reichenbach は，今話をしている時点(S)と，出来事が起こった，または起こる時点(E)とを定め，E が S より前であれば過去，同じであれば現在，後であれば未来である（図1参照）。

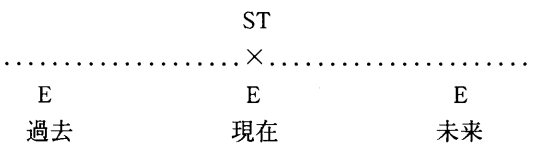


図　1

これだけではⅠ章でみたように，動詞の時制が現在の時，過去，現在，未来の出来事を指すことがあるといった事実と時制との関係を説明できない。このことを考えるうえで，参考となるのは Reichenbach の理論であるが，Reichenbach はこの E，S 二つの時点の関係にもう一つの時点 R を設定した。Reichenbach によると，S と E は R（reference point）を媒介にしている点であり，第一義的な時制関係をなすのは S と R の関係である。この R の設定が，時制を考える上で重要

であると思われる。

Smith (1991)は，この理論を参考にST (Speech Time), SitT (Situation Time)とRT (Reference Time) を設定した。STはSに，RTはRに，SitTはEに相当するであろう。伝えられるものは，出来事 (event) だけではなく状態 (state) の場合もあり，両方を含んだ状況を考える必要があるので，Smithが行ったようにEを想定するよりも状況 (Situation) が起こる時点として，SitTを設定した方がよい。本文では，Smithのこれらの用語を用いることにする。時の流れの中でこれら3つの時点の関係が，時の位置を定める体系の中で明らかに重要な役割を果たす。STは話をしている時点で，基準点としての役割を果たし，表面に出ることはない。RTは文の時の視点 (temporal standpoint) であり，複文では二次的なorientation pointである[3)]。STは必ず現在であるが，このSTを基準にしてRTとSitTは，過去，現在，未来のいずれにもなり得る。

Ⅱ．2．時制 (Tense)

時の流れの中でSTを基準にして，RTとSitTは互いに関係している。この3種類の時点が，どのような関係にあるかが，時の位置を知らせる上で重要なものとなる。時の設定の体系の中で，文法化して，表面に現れ大きな手掛かりになるのは，動詞の時制である。文法範疇の時制は，RT，SitT，STのうちいずれを表すのであろうか。ここで，時制で文法化されて示される時は，この3種類の時点の内RTであると仮定し，その正しさを証明していく。STは基準となるのであって，表面では表されず時制で文法化されることはない。英語の時制は過去と現在に分かれ，全ての動詞はかならず時制の範疇の支配を受け，過去か現在かいずれかを選択しなければならない。時制が過去の場合は，動詞は形態素 ⟨− ed⟩ をとるという形態的な変化をともない過去形になる。例文（1．a）では，動詞の時制は過去であり，今視点となっている時点は，STより前（過去）であり，SitTもそれに一致している。動詞が過去形であるときは，文の視点は過去で，状況が起こった時点も過去である。つまり，この3つの時点の関係でみると，英語の過去時制においては，RTはSTより前にあり，SitTはこのRTに一致する（図2参照）。

過去時制（Past） .....X.....
SitT ST
RT

図 2

もう一つの時制は現在であるが，次の例文のように，時制は現在形で表されているが，話されている状況は，現在の習慣であり，現在の状態であり，未来の予定である。例文(5)では，現在の習慣で，以前から現在までこの習慣は続き，これからもこの習慣が続くであろうこと，また，例文(6)では，Johnが東京に住んでいるという状況は現在も続いているし，またこれからも続くであろうこと，例文(7)では，現在の時点では実際にレハーサルをするのは明日であることが分かる。

(5) John swims in the pool everyday.

(6) John lives in Tokyo.

(7) John rehearses tomorrow.

Kenworthyは英語の時制は過去は過去の時を伝えるが，現在時制は過去以外の時を伝えることに

注目し，英語の時制の文法範疇を次のように分けた[4]。

tense { past / non-past

この指摘は，文法範疇の時制はSitTを示していないことを示したものと考えられる。しかし，それぞれのSitTは現在とは限らなくても，現在時制を用いたこれらの文の共通点は，文の時の視点はあくまで現在であるということである。時制がRTを示すという仮説を認めれば，わざわざpresentをnon-pastに変える必要はない。上の例文でも解るように，これらの文のRTは全て現在である。(6)の文では，未来の状況の真偽の方は問題ではなく，現在の時点での予定が述べられており，文の視点は未来ではなく現在である[5]。つまり，RTは現在であり，ことからも，時制はSitTを直接示すものではなく，RTを示すものであると考えが支持される。SitTは，このRTより後にあることは，tomorrowという時の副詞によって決定される。このことは，この副詞がなければ，SitTは未来ではなくなることからも明らかである。以上のことから，図3で示されるように，英語では，現在時制は，視点となっている時点（RT）は現在であるが，SitTはこれに一致するとは限らない。

現在時制(Present) .....X.....
//// ST ///SitT////
RT

図 3

以上見て来たように，英語の文法化された時制は過去時制と現在時制しかなく，どちらかを選択しなければならないが，視点を未来に置いて表現しなければならない場合がある。その方法の一つは，will，shall，be going to ～ など助動詞を用いる方法で，他方はⅡ．2で見たように，現在時制と未来の時を表す副詞を用いて表す方法である。

(8) He will come back soon.

(9) The ship arrives on Thursday.

(10) He is coming to the party tomorrow.

Smith (1981) は，(9)のように助動詞を用いずに現在時制と副詞を用いる場合をFuturateと呼び，例文(8)のように *Will* 助動詞を用いて未来を表す形を *Will*-future として，二者を区別した[6]。Smithはさらに Futurate を(10)のように現在形だけで未来のことを表す Simple Futurate（以後SFと省略）と，(11)のように現在進行形を用いた Progressive Futurate（以後PFと省略）に分けた。これをまとめると，次のようになるであろう。

{ *Will*-future: auxiliary (will/shall) + V

Futurate: V (Present) + Temporal Adverbials
{ Simple Futurate: V (Present) + Temporal adverbials
Progressive Futurate: BE (Present) + V-ing + Temporal adverbials

この区別の長所は，文法形態上の違いを明確にしている点と，Futurate には必ず時を示す副詞が必要であることを明示したという点である。PF と SF の違いについては，いろいろ議論されているが，ここで重要なことはむしろ，PF と SF を一つにまとめ，*Will*-future と区別した点である。この区別は，助動詞の有無と副詞の必要性という形態上の違いから，現在時制の下位区分へと導く。つまり，文の視点(RT)が現在ではなく未来である時制を設定する必要がでてくる。Futurate は必ず時の副詞を必要とするが，*Will*-future の方は時の副詞がなくても未来の状況を伝えることができる。この事実は，後者の文では文の視点が未来にあることを示している。*Will*-future の時制が文法化して現れるのは助動詞であり，その助動詞は現在形であるので，この形の時制は現在とすべきである。従って，独立した未来時制を設定するのは不可能かもしれないが，助動詞を用いるという形態上の違いもあるので，未来に視点を置ける特別な現在ということで，現在時制の下位区分としてなら未来時制も認められ得るであろう。文の視点の違いが，2種類の違う形で文法化されると考えれば，SitT が未来の時を表す2種類の形が存在する事実と結び付く。*Will*-future の RT は未来であるが，Futurate の方は現在だと言う Smith の考えとも一致する。過去時制と同様に，*Will*-future の方は RT と SitT が一致する。従って時を位置づける副詞はなくても，SitT が未来であることが伝えられる。他方 Futurate の方は，RT は現在で，SitT は RT と一致しないため，SitT が未来であることを示すのに時の副詞が必ず必要となる。この考えを図式化すると，次の図4のようになるであろう。

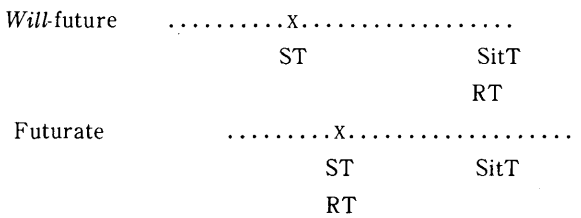


図 4

Ⅱ．3．完了形（Perfect）

英語には，時に関して特別な意味を持つ形がある。一つはいわゆる完了形（Perfect）で，もう一つは進行形（Progressive）である。先の ST，RT，SitT の3つの時点を用いると，それらの形の役割を見るうえでの重要な手掛かりが与られる。次の例文(11)は，*have* + p.p.の形，つまり完了形を用いた文であるが，英語ではこの形は，ドイツ語などに見られるような単に状況の時の位置づけの役割を果たすのではなく，特有の情報を伝達する役目を持っている。先の3つの時点の関係から，完了形の固有の働きを調べることにする。

(11) a. *Now* Andrew has arrived.
b. *Last Sunday* Andrew had (already) arrived.
c. *Next Sunday* Andrew will have already arrived.

これらはそれぞれ時制は異なるが，Andrew が到着するという状況が必ず話者が視点としている時点より前に起こっているという共通点を持つ。換言すれば，SitT は必ず RT より前にあるとい

う点で一致している[7]。(11. a) は現在完了形の文であるが，時制は現在であるため，RT は ST と同じ現在であり，SitT はこの2時点よりも前にあることが示されている。過去完了形の (11. b) では，RT は ST より前にあり，SitT はその RT よりさらに前にある。(11. c) は *Will*-future を用いた未来完了形であるが，RT は ST より後にあり，SitT はその RT より前にあることが分かる。このことをまとめると，図5のようになる。

特に現在完了形の文では，過去の状況が何らかの形で現在と結び付けられていると文法家に指摘されていることであるが[8]，このことも，現在完了形を用いた文の視点は過去ではなく現在にあるということ，つまり RT は現在であることを示していると思われる。ここでも時制は RT を示すという仮説が正しいことを支持している。さらに，RT が未来であることを文法化する未来時制の必要性も示している。また，このように完了形の特徴を時の3点を用いて説明することは，完了形を用いない文との違いも明らかにすることができる。さらに，SitT が RT より必ず前にあるということは，完了形で表された場合，状況が完了点をもっていると解釈されることに結び付き，この形がアスペクトとも大いに関係があることも示している。

(a) Present perfect .....x.....
SitT　ST
RT

(b) Past perfect .....x.....
SitT　RT　ST

(c) Future perfect .....x.....
ST　SitT　RT

図 5

Ⅲ. アスペクト体系

Ⅲ. 1. 状況と文法

英語の時に関する情報は，Ⅰ章でみたように時の位置を設定するだけでなく，状況の内部の構造についての情報も伝える。つまり，アスペクトに関する情報である。従って，これに関係する体系をアスペクト体系と呼び，英語ではどのようになっているのかをこの章で調べることにする。アスペクトは状況の内部構造についての話者の視点を述べるものである。状況に始点 (Initial point: 以後 I と省略) と完了点 (Final point: 以後 F と省略) があり一つの固まりと見なされる場合，その状況のアスペクトは完結相 (Perfective aspect) であるが，一方そのような始点，完了点をもたず両脇が解放された状況の場合は，非完結相 (Imperfective aspect) となる。次のように，完結相では始点と完了点で状況は閉じられているが，非完結相では開かれている。このことをまとめると次のようになるであろう。

完結相 (Perfective aspect)　with endpoints (closed)　...o.....o.....
I　F

非完結相 (Imperfective aspect)　without endpoints (open)　.....
←——→

これらのIとFがあるか，つまり，状況が閉じられているかどうかに対する話者の視点は状況そのものの構造と，文法形態の二つによって表されると考えられる。その中心は状況そのものの性質である。Vendler (1967) の行ったアスペクトに関する動詞の分類を拡大して状況の分類に変えることによって，状況を4タイプに分けることができる。そのうち状態 (Stative) は始点も完了点も問題にされていないので，非完結相である。出来事 (event) のうち [+ Telic] の要素を有する状況 (Accomplishment, Achievement) が完結相を持ち，持たない状況 (Activity) が非完結相となる。状況のタイプの決定には，動詞だけでなく，主語，目的語の名詞の性質，冠詞，数量詞などによって影響され決定されるが[9]，違いを明確に直接示す文法手段は見られない。つまり，完結相か非完結相かのアスペクトの違いは状況の構造によって表され，文法形態上の違いとしては表されない。アスペクトとそれを表す文法形態に一対一の関係がみられないということである。

Ⅲ．2．完了形とアスペクト

完結相か非完結相かを明確に直接示す文法手段はないが，英語のアスペクトに関係する文法形態には進行形と完了形とがある[10]。ここでは，完了形とアスペクトの関係について考察する。完結相では状況を一つの固まりと見ると言うことは，Fが存在し，RTはこのFと一致するかFより後にあるということである。一方，Ⅱ．3で見たように完了形ではSitTはRT (つまりこの状況のF) より前に来る。その結果として，完了形で表された文のアスペクトは完結相を示すことになる。ただ，それによっても，完了形は完結相を文法化したものであると見なすという結論は導かれない。特に，状況がもともとIとFを有している場合には，過去時制であれば完了形で表されても表されなくてもアスペクトは完結相である。過去形で表されている(12)の例文では完了点 (F) が示され，また，完了形を用いた(13)の例文でも完了点 (F) が示され，どちらのアスペクトも完結相である。

(12) a. John ate the apple.
b. Andrew arrived at the station at 10 o'clock.

(13) a. John has eaten the apple.
b. Andrew has just arrived at the station.

このように見ると，完了形はアスペクトに影響を与えていないようである。しかし，次のように状況がActivityの時は，状況の始点 (I) には言及していないが，SitTは完了点とまでは行かなくても，終了点 (同じくF) と見なされ，RTより前にあるか，それに一致する。したがって，アスペクトは非完結相から完結相へと変化する。

(14) a. John walked in the park. .....X.....
SitT ST
RT

b. John has already walked in the park. .....F.....X.....
SitT ST
RT

次に，状況がStativeの場合を考えてみる。

(15) They have lived here for ten years.

いわゆる継続を表す現在完了であるが，十年間住んでこれからも住むことを意味してはいるが，「ここに住んでいる」という状況は十年前に始まり(I)，十年後まで，つまり現在まで続いている。(これから先どのくらい住むかは不明だが) 状況の十年間を一区切りとして見たもので，ST (＝RT) は完了点(F)と見なされ，アスペクトは完結相と解釈される。ここでもアスペクトが非完結相から完結相へと変化している。以上のように，英語では完了形は直接アスペクトを文法化したものではないが，話者がRTをFと見なしているという話者の視点を伝えるため，結果として完結相を導く機能を持つと考えられる。

Ⅲ．3．進行形の意味するもの

英語では全ての文は必ず進行形でない普通のシンプル形(Simple)か，進行形(Progressive)かのどちらかで表されることが選択される。次の例文でも(16. a)では「小説を読む」行為は既に終わっており，アスペクトは完結相であるが，(16. b)ではRTの時点ではその状況の行為は行われている段階で，まだ完了点には至っておらず，非完結相である。

(16) a. Cathy read the novel. .....I.....F.....
////////// RT ST

b. Cathy was reading the novel...I ...×....F.....
////RT//// ST

シンプル形か進行形かの選択が余儀なくされ，その結果上記のようなアスペクトの違いが表されるということで，進行形はアスペクトに関与する唯一の文法形態であるといえる。しかし，進行形を用いた場合は非完結相で，進行形を用いない形の場合は必ず完結相であるという一対一の対応は見られない。アスペクトはむしろ，Ⅲ．1で見たように，状況そのものの構造によるものである。しかし，(17)(18)の例文はどちらも非完結相であるが，(17)と(18)には明らかな違いがある。

(17) a. John swam in the sea.
b. John read books.

(18) a. John was swimming in the sea.
b. John was reading books.

(17)ではIとFが言及されていないのにたいして，(18)では，IとFはあることが前提になりRTではまだFに至っていないこと，つまり，行為の進行中であることが伝えられる。二者選択であっても，シンプル形と進行形は並列ではなく，進行形を用いる時は何か特別の情報を伝えたい場合であると考えられる。状況がActivityでもAccomplishmentでも，進行形であれば状況がRTの時点で進行中であることが伝えられる。内部構造がStative，Achievementの場合は普通は進行形にはならないとされている。しかし，(19)のように用いられたときは，本来Stativeである状況に，終了点(F)が認識されるようになり，RTの時点で行為が進行中であると解釈される。

(19) The boy was being quiet.
He is living with his sister.

状況がAchievementの場合も普通は進行形にはならないのだが，(20)のように用いられた場合にはIとFが離れ，RTの時点でFに向かっている途中であると解釈される。

(20) The team was winning.

(19)(20)も本来用いられない形が用いられることによって，特別の意味があることが伝達される[11]。

以上のことから，非完結相の下位範疇の進行相(Progressive)は必ず進行形で文法化されると結論づけられる。確かに進行形はアスペクト(進行相)を決定する唯一の文法形である。それは，RTでの特別の話者の視点，つまり行為が進行中であるという視点を表すことができる形であるが[12]，状況の内部構造に直接関与するものではない。言い換えれば，RT時点での状況の構造に対する話者の視点のみ，つまり進行相のみ，進行形で文法化される。従って，英語のアスペクトを表す体系は，状況そのものが有するアスペクトと，進行相を文法化する体系との二重構造になっていると考えられる。特別の場合を除いてはアスペクトはシンプル形で表され，状況そのものにIとFの有無で完結相か非完結相かが決定される。RTの時点での行為の進行相を表したいときにのみ進行形が用いられるのである。

Ⅲ．3．アスペクトと時制

過去形で表されている時は，上の状況のタイプがそのまま反映され，時制はその状況のRTをしめすが，現在時制で表されている時は，状況がStativeの場合を除いて，その役割はRTが現在であることを示すだけでなく，その状況の内部の構造についても言及する。つまり，アスペクトに関する情報も与える。次の(2)，(21)，(22)では，RTは現在であるが，実際の行為は近い過去から未来に及び，伝えられる内部の状況は，もはや行為ではなくなり，その習慣が表される。アスペクトは，時制が過去であれば，Ⅲ．1．で見たようにそれぞれ異なったアスペクトをもつが，現在になると個々の行為(IもFも含まれている場合でも)は過去から現在そして未来へと続く行為の一つと見なされ，話者の述べたい状況全体にはIもFもない解放されたものとなり，状況全体の内部構造のアスペクトは非完結相になる。

(2) John swims in a pool everyday.

(21) He eats an apple a day.

(22) He always wins a race.

ST現在のことを言及し，なおRTに行われている行為であることを示すためには，進行形を用いて表現しなくてはならない。

(2)' John is swimming in a pool.

(21)' He is eating an apple now.

次の例文でも (23. a) は現在の習慣，(23. b) は現在の行為を表している。

(23) a. Does he smoke? .....X.....

○ ○ ST (= RT) ○ ○

b. Is he smoking .....I.....X.....F.....

//ST (=RT)///

ここでは，時制が一義的にRTを，二義的に非完結相を示す役割を果たしている。

Ⅳ. 時に関する2つの文法体系の関係

以上考察したことから，英語の時を表す構造は，3つの部分からなると考えられる。これらは，互いに相い補って機能している。状況（Situation）の外枠の時の位置を定める体系と，状況の内部構造に関する体系からなる。これらの関係をまとめると図6のようになる。

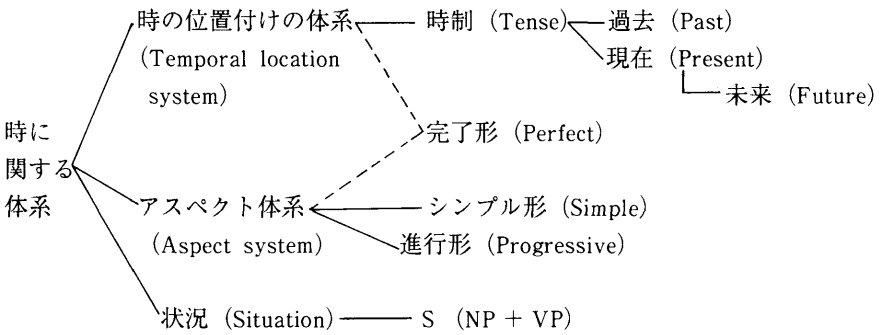


図 6

Ⅴ. 時を表す副詞類

時に関する副詞類は，time adverbials とか，temporal adverbials と呼ばれて，他の副詞と区別される。Smith (1991) は，これらの副詞を“Temporal adverbials”と呼び，意味の上から，次のように分類している[13]。

(1) Temporal locating adverbials
(2) Completive adverbials
(3) Durative adverbials
(4) Frequency adverbials

(1)は状況の RT か SitT を示し，(2)は状況が完了するのに要する時間，(3)は状況の継続する時間，(4)はその頻度を表すとしている[14]。この分類は，意味の視点から時とのかかわりをうまく分類したものであるが，状況の時の外枠と，その内部構造にかかわる副詞を同列に扱い，その統語的な特徴との結び付きについては，触れていない。

ここで，これらの副詞類の文中の時に関する意味と，文法範疇との結び付きに視点を置いて，分類し直してみよう。まず，副詞が，どの文法範疇時と関係があるか，それを，副詞の置かれる位置になおして表してみると，次の図7のようになる。

時の副詞類，Temporal Adverbials（略して，以後 T.Adv）が置かれる位置は，時制，アスペクト，状況，それぞれにかかわるものとして3カ所考えれる。時の副詞類は，体系としては時の位置ずけの体系，アスペクト体系，状況と別であるが，実際の働きは，それらを明確にするために機能する。直接その体系に属しているのではないが，その働きをする位置を図の上で示すために

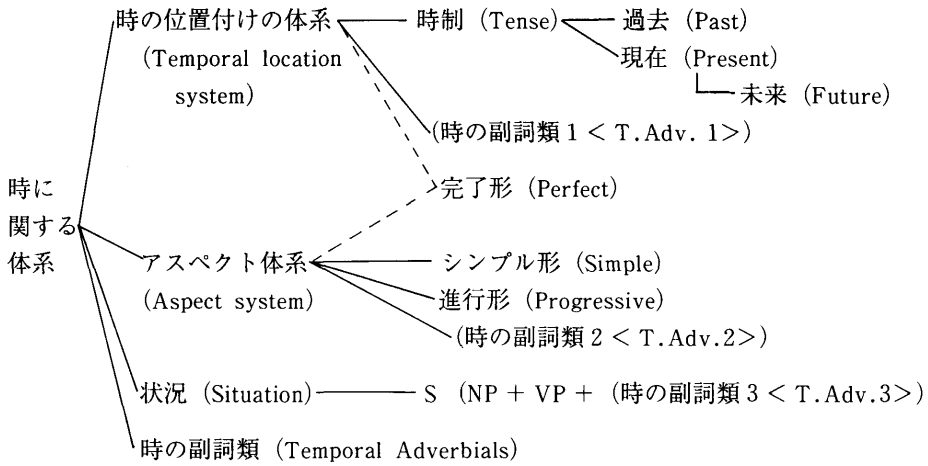


図 7

( ) に入れてある。従って図7の時の副詞類1, 2, 3 < T.Adv 1, 2, 3>は, 時の副詞類が実際に役割を果たす位置を示すが, そこに現れる副詞類はそれぞれ意味の上にも特徴があり, 次のように分類できる。

時の副詞類1 : Temporal specifying adverbials (時の設定副詞)

例 yesterday, today, tomorrow, at six o'clock, when he entered the room, after he arrived at the station

時の副詞類2 : Frequency adverbials (頻度を示す副詞)

例 always, often, everyday, two times a week, whenever he eats lunch

時の副詞類3 : Situational adverbials (状況副詞)

a. Completive adverbials (完了副詞)

例 in an hour, within an hour,

b. Durative adverbials (継続副詞)

例 for two hours, from 1 to 5 pm, during he stayed in Japan

時の副詞類1に属する時の設定副詞は, 普通は図7の時の副詞類1 < T.Adv.1>の位置に置かれ, 時制とともに, RT の置かれた時を特定化する役割をはたす。時の副詞類2に属する頻度を示す副詞は, 状況の起こる頻度を表し, 主にアスペクト的な面を修飾し, 従って, 何もない場合には, 図7の時の副詞類2 < T.Adv.2>の位置に置かれる。時の副詞類3に属する状況副詞は, 状況の内部の構造に直接関係する副詞である。IからFまで状況が完了するのに要する時を示す完了副詞と, その状況が継続する時を示す継続副詞に分けられる。これらの副詞は図7の時の副詞類3 < T.Adv.3>の位置にくる。

時の副詞類が一文に二個以上表れることもあるが，その表れ方は次のように様々である。

(24) John built a sandcastle *in an hour yesterday.*

(25) Tim *always* read books at least *for three hours when he was young.*

(26) The ship arrived at the station *at 8:15 pm last Sunday.*

例文(24)では，完了副詞(in an hour)と時の設定副詞(yesterday)がそれぞれの位置に置かれて情報を与えている。例文(25)では，時の副詞類1，2，3各グループに属している副詞が一つずつ表れている。また，例文(26)では同じ時の設定副詞に属する副詞が二つ出て来ている。しかし，この文では，二つの副詞は文中において，異なった役割を果していると考えられる。つまり，last Sunday は時制と共に RT を示すが，at 8:15 pm は SitT を示している。時の設定副詞は場合によっては，状況を修飾する副詞の位置（図7では，時の副詞類3＜T.Adv.3＞の位置）に置かれ，状況の起こる時，つまり，SitT を示すことができる。が，時の副詞類3＜T.Adv.3＞が定位置である状況副詞は，図7の時の副詞類1＜T.adv.1＞の位置に置かれて，状況の時を設定することはできない。従って，次の例文では，時を設定する副詞 tomorrow が(27. a)と(27. b)とで異なった位置に置かれ，異なった働きをしている。

(27) a. The ship will arrive at Yokohama *tomorrow.*

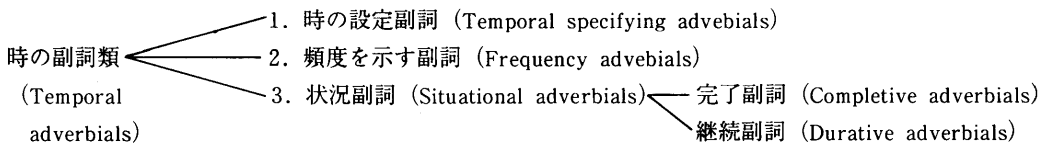
b. The ship arrives at Yokohama *tomorrow.*

(27. a) では tomorrow は＜T.Adv.1＞の位置にあって，時制とともに RT（この場合は，未来）を特定化する働きをしている。つまり，今，話題としている時を，明日に特定化し，その明日に，[the ship arrives at Yokohama] という状況の起こることを示している。一方，例文（27. b）の tomorrow は＜T.Adv.3＞の位置に置かれ，SitT を表している。つまり，RT は現在で，その時点で [the ship arrives at Yokohama tomorrow]が，真となる。同様に，(28)の文もある解釈のもとでは正しい。

(28) Have you got up *at 5:30*?

この場合，時の副詞 at 5:30は，「5時30分に起きたか」の意味で用いられる場合，つまり，＜T.Adv.1＞に置かれるのであれば，RT と一致しないので文法的に正しくない文となる。が，「5 :30に起きたことがあるか」を尋ねる場合には，この副詞 at 5:30は SitT を示し，＜T.Adv.3＞の位置に置かれる時には，文法的に正しい文となる。

先の図7の時の副詞類（Temporal Adverbials）の所に次の分類を当てはめれば，図7は完成し，英語の時の体系が図式化される。



V. 結 論

以上のことから，英語の時に関する構造は，伝えようとする状況（Situation），時の位置付けの体系（Temporal location system）と，アスペクト体系（Aspect system）との３つの部分からなると考えられる。これらは，独立しているが，互いに補って機能する。核となるのは，話されている状況（Situation）で，その状況の時を時間の流れの中で位置を示すのが時の位置づけの体系であり，その状況の内部構造に対する話者の視点を伝えるのがアスペクト体系である。時の位置づけの体系の中心となる文法範疇は時制（Tense）であり，時制はSTを基準として話題の視点となっている時を(RT)を提示する。状況が起こる時点(SitT)はST，RTとの関係で示される。英語の時制は簡単で，全ての文は必ず過去(Past)，現在(Present)の２つの内一方を選択する。時制が過去の時は，形態素|-ed|で表され，RTはSTより前でSitTもRTと一致する。現在の時は，RTはSTと一致するが，SitTは現在と未来の可能性がある。ただし，RTが現在であるため，SitTを特定化する副詞が必ず必要となる。現在の下位時制として未来を置くことができる。未来時制は形態的には現在時制で表された助動詞と動詞の原形という形態的に特別の形をとる。未来時制が文法化されたときは，RTは未来でありSitTはRTに一致する。

次にアスペクト体系は，時制とは異なった状況にたいする外枠ではなく内部構造に関係する話者の視点を明らかにする。アスペクトに関しては状況そのもの内部構造に始点と終了点があるかどうかがアスペクトの決定に大きな役割を果たす。アスペクトを直接示す文法手段は進行形(Progressive)かシンプル形(Simple)かの選択に表れる。形態上どちらかを選ばなくてはならないが，進行形はRTの時点で行為が進行中あるということを伝える進行相のみを文法化したもので，完結相か非完結相の対立を直接示すものではない。

また，完了形は一義的にSitTは必ずRTの前にあることを伝える形で，結果的に完結相を表す。従って，この形は時の位置づけの体系とアスペクト体系の両方に関与するものである。また，時制の中でも現在は現在の習慣を表し，アスペクトも非完結相である。従って，現在時制は二次的にアスペクトを表す働きを持つとすることができる。時を表す副詞類も体系に重要な影響を及ぼし，その体系の働きを明確にし，且つその役割を補う形で関与する。

註

1．その二つの体系は互いに独立しているが，相互にかかわりあっている。また，一つの文章にどちらか一方しか現れないということはなく，必ず両方の情報が得られる。

2．ここで述べられるReichenbachの考えは，Smith (1991)，Hornstein (1993)で引用されたものを参考にしたものである。

3．Smith (1991) は次のように３つの時点について述べている。"Speech Time is the center of the system. Reference Time is the temporal standpoint of a sentence; and in complex sentences, a secondary orientation point. Situation Time is the time of the event orstate,identified as the interval [I]. The times are related to each other by the basic ordering relations." (p.140)

4，J. Kenworthy (1991) は現在時制は現在の時だけを表すのではないことを次のように述べている。

"While there is a frequent and direct correspondence between past tense forms and past time, there is not the same correspondence between 'so-called' present tense forms and present time. Instead we will use 'past' and 'non-past' for the category of tense in English" (p.72)

5. Smith (1981) も現在時制で未来を表す文の RT は現在であると述べている。
6. Smith (1981)。
7. Smith (1981) はこの違いについて，興味深い分析を行っている。
8. Quirk et al. (1985), Comrie (1976), Wood (1965) などが述べている。
9. 山下 (1988) を参照。
10. Quirk et al. (1985)。
11. 状態の時は普通 Progressive は用いられないが，次の用に用いられる場合には，行為の意味合いが濃いくなる。また，言及する時間も範囲が狭くなる。

    a. Mrs. Prescott is living in New York.
    b. Why are you smelling the meat? Has it gone?
    d. We're having a wonderful time.
    e. The children are being very quiet.

    これらは，有標性 (Markedness) の考えを取り入れないと，なかなか巧く説明がつかない。
12. Smith (1991) では，"Aspectual viewpoints function like the lens of a camera, making objects visible to the receiver" と述べている。
13. Smith (1991) p.155。
14. Smith (1991) pp.154-160。

References

1) Carlson, Lauri. 1981. 'Aspect and Quantification.' In P. Tedeschi and A. Zaenen (eds.). *Syntaxs and Semantics 14: Tense and Aspect*. 31-64. New York. Academic Press.
2) Comrie, Bernard.1976. *Aspect*. Camridge. CUP.
3) Comrie, Bernard, 1986. *Tense*. Cambridge, CUP.
4) Dowty, David. 1977. 'Towards a Semantic Analysis of Verb Aspect and the English Imperfiective Progressive'. *Linguistics and Philosophy* 1, 45-77.
5) Hopper, Paul, (ed) 1982. *Tense-Aspect: between Semantics and Pragmatics*. Amsterdam; John Benjamins Publishing Company
6) Hornstein, Norbert, 1993. *As Times Goes By*. Cambridge, Massachusetts, MITPress.
7) Jespersen, Otto. 1931. *A Modern English Grammar on Historical Principles, Book IV, Syntax*. London. Geroge Allen and Unwin.
8) Kenworthy, Joanne, 1991. *Language in Action*, Longman, London.
9) Langacker, R. 1982. 'Remarks on English Aspect,' In Hopper (ed), 265-304
10) Langacker, R. 1987. 'Nouns and Verbs.' *Language 63*, 53-94.
11) Lyons, John. 1977. *Semantics, Volume 2*, Cambridge, CUP.
12) Mourelatos, Alex. 1978. 'Events, Processes and States.' *Linguisics and Phlosophy* 11, 415-434.
13) Palmer, Frank. 1965, *A Linguistic Study of the English Verbs*. London, Longman.

14) Quirk et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of English Language*. London. Longman.

15) Reichenbach, Hans, 1947, *Elemnts of Symbolic Logic*. London. Macmillan.

16) Smith, Carlota, 1981, The Futurate Progressive; not Simple Future + Progressive. In Hendrick R., C. Masek, and M. Miller, eds. Papers from the Seventeenth Regional Meeting, Chicago Linguistics Society, 369-82.

17) Smith, Carlota, 1991. *The Parameter of Aspect*. Dordrecht. Kluwer Academic Press.

18) Tedeschi, P and Zaenen, A., (eds), 1981. *Syntax and Semantics 14: Tense and Aspect*. New York. Academic Press.

19) Verkuyl, Henk. 1972. *On the Compositional Nature of the Aspects*. Dordrecht. Reide.

20) Vlach, Frank, 1981. 'The Semantics of the Progressive.' in Tedeschi and A Zaenen (eds).

21) Vendler, Zeno, 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca. Cornell University Press.

22) Wood, F T, 1965. *A Remedial English Grammar*, London, Macmillan.

23) Yamashita (Nieda), Mitsuko, 1988, Perfective and Imperfective in English, *Bulletin of Kyoto University of Education*, Ser.A. No.72, pp.99-120.